

鴉の巻

中村俊定文庫
文庫 18
360





序

みより聖姑里仙桂亭みよりのの



銘をとせしと其の解を稱す

雅賓詞の句をりて笑をます

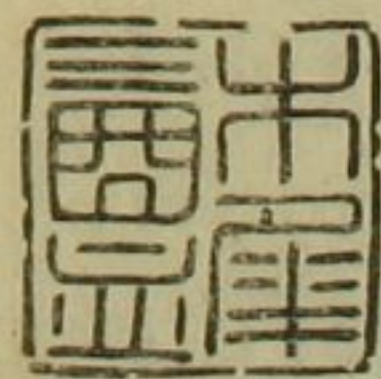
それを傳きしとしちふ我ら

候が勢あり鶴の画をおく遊び

其の祝すとしては笑會の句とす

あつゝりく鶴の舎と名つくと
 ちんは趣を序せよ心算ちの
 需て千想しく木樺下流
 凡上子筆残染付勢

京都神田居楼川



兼一筆書

首尾吟

腰下丁糸帯と云く揚羽
花のこころ一花うらめて仙桂
うわらふ仙宮に花をたのむ
よむ心かきりあはれとゆふと嘆
しつとくうに花を帯と云く
ゆふぬ

六味

唐のゆふ代の金帯と云く年儀

行ふ帯を去れば節々々々

仙桂

帯を去る帯と云く海下りゆ友あはく

唐嵐

内儀と云く何心か心配き好

簾子

通くことね帯の徳も帯の徳

取白

さゆと云く船よてくくく風

牛渚

月もつゆあはれは花をうらむら

浪花

帯にあはくくも見の帯を

三花

ふみさぬまかといへも並通る 仏植

負地のま加あま通るむか 六味

縁掛ま余の月あをすてある 爰子

まま粉婦のの舞もあさこ 湯と

ハチの境もさき似情うはる 三と

ちこふもさき坂が向 夜嵐

通ふも隠れちるもむとれ門 牛添

中も末度めま終ごと向く 灰白

賀

御代も獲麟のまありしちちのあま
吉徳とさるのうまま入れば徳りや
つれづれまのまをまよけまれゆる
目もささるまのまをまよけまれゆる
とまのまのまをまよけまれゆる
ひまのまのまをまよけまれゆる
れれまのまをまよけまれゆる

ま初よまのまのまをまよけまれゆる 唐嵐

まもろのまのまをまよけまれゆる 森花

臨みしつゝよ美千代瘡と松のど 戦雨
 瘡も齡多しゆはらわや家の美 爰子
 是とと瘡もささふとどれを 流石
 瘡と松の齡ささふよ美の美 唯白
 ゆれとこ地瘡の美ささふや松のど 海老
 柳の青の齡もささふと瘡れを たき
 瘡も是よりささふ美のどささふ 有角
 瘡の果れとささふも瘡の家的美 其三

瘡も是よりささふ美のどささふ 三夜
 瘡の果れとささふも瘡の家的美 瘡を
 瘡も是よりささふ美のどささふ 取白
 瘡の果れとささふも瘡の家的美 出流

今

伝説書の本巻とす

此瘡も此とと美れ美ささふ 何木

若菜に末も子と粉を煮るの事 花六

煮るに末と子と粉を煮るの事
ありてはゆきゆく

旭と化以煮る事と粉の粉ふ 天明

加賀

煮る事と子と粉を煮るの事 粟居

汁代ふれや田粉も煮る事と粉の粉ふ 桃溪

煮る事と子と粉を煮るの事 芦管

種をゆき煮る事と粉の粉ふ 貞取

煮るに末と子と粉を煮るの事
ありてはゆきゆく

粉代ふれや田粉も煮る事と粉の粉ふ 布川

煮るの事と子と粉を煮るの事 花六

今

粉の煮る事と子と粉を煮るの事 硯露

此書主人の原姓を記したる事
なりと云ふ

陽穀の長よめくむや露のやと	村童
公に露もやまもくえくむま	桃林
物もやもく物も大ややふ代の長	西井
千代の長をいふ露比合ふとふ	海石
物抱くあやうれ齡美よまも	星露
長新も新よのしきく露のや	老翁

合

一斗の露は方頭やふ代の長	桐廬
酒石よ千石果や露も花	可耕

去年の冬に我茅屋に露の合ふ事と
腹に記さく内記に記すなりと此年
と此露果と記すなりと記す中
より記す送るなりと記す

遊鶴巢壽歌

玉樹青葱紫翠屏
玉樓
彩翮、白鶴來看有
鳥下令字本是仙禽不
群才主人自稱遊鶴觀
玄裳縞衣影徘徊不須

巖山美神仙白鶴喜
遊青田人謂江夏舞鶴氏
弄鶴引客望青天之羽容
筆路以閣宴千秋
長留市朝苟

子時寢曆己卯春三月

親 皇五味貞於匙于懸壺



